

エネルギーと環境の両立を後押し

スペイン語能力を生かし、中米6カ国を股に掛け、プロジェクトに携わる高島千佳さん。自然環境を大切にする現地の思いを背負い、環境にやさしいエネルギー開発を目指して奮闘中だ。

偶然訪れた展示会で 民族や国家間関係に関心

小学生の頃、アウシュビッツの遺品展示会を訪れたことがきっかけで民族や国家間の関係に興味を持つようになり、大学時代は、「紛争予防」を研究する傍ら、JICA国内センターでアルバイトをしました。印象的だったのは「研修を終えたら、母国でこんなことをやりたい」と語る各国の研修員の姿。さまざまな国の人々と仕事がしたいと考え、卒業後はJICAに就職しました。地球環境部で勤務していた頃、中南米の気候変動などの案件に携わっていた関係で、半年間、人事制度を利用してメキシコの語学学校でスペイン語を勉強する機会を得ました。この時に、現在の中米での業務の助けとなる語学スキルを身に付けることができました。

エルサルバドル事務所には、2014年9月から勤務しています。実際の業務は中米6カ国にわたり、これらの国で円借款事業の進捗を管理したり、他の事務所へノウハウを提供するなどの側面支援を行っています。

地熱発電でコスタリカの エネルギー政策を後押し

現在の担当案件は、コスタリカ北西部のグアナカステ県ラス・バイラス地区に新た

な地熱発電所を建設するプロジェクトです。2カ月に1回程度、現地に赴いて実施監理を行っています。具体的には、入札書類のチェックや、融資を受けるための書類の審査など、プロジェクトの円滑な実施を支える仕事が必要な業務です。

コスタリカは近年、好調な経済成長を背景に電力の需要が増加しており、環境保護先進国として名高い同国は、再生可能エネルギーを主な電力源にすることを目標に掲げています。中でも、この国は地熱発電のポテンシャルが高く、日本は地熱発電所の建設支援を通じてエネルギー政策を後押ししています。先日、プロジェクトの一環として、日本が1980年代に円借款で支援した、この国で初めての地熱発電所を視察したところ、現在もしっかりと稼働していました。

また、環境保全に対する自主的な取り組みにも目を見張るものがあります。発電所が建設された当時、電力公社は敷地内に植林を行い、「再森林化」を進めたそうです。そのかいあって、発電所の周囲には今では新しい森が広がっています。「コスタリカは、地熱発電が自然環境と共存し、再森林化を通じて環境保全にも貢献できることを証明している」と、電力公社技師の方が誇らしげに話すのを聞いて、自分が今、携わっている地熱発電所建設プロジェクトの将来像を描くことができ、励みとなりました。



エルサルバドル事務所

高島 千佳

TAKAHATAKE Chika

大学卒業後、2001年にJICAに就職。地球環境部、ボリビア事務所などを経て、2014年9月より現職。



ボリビアの地方給水プロジェクト。完成した井戸を村へ引き渡す式典に参加する高島さん(左)

過去から続く信頼関係を受け継ぐ

以前担当したボリビアの地方給水への協力は、日本が20年以上にわたり支援を続けてきたものです。私が業務に携わったのは、給水人口が拡大し、支援の結果が具体的に現れ始めた時で、地方政府の方々が、式典などの場でいつも過去からの日本の協力に謝意を示してくれるのが大変嬉しく、誇りに感じました。長年にわたる協力の一端に携わる者として、過去から受け継がれてきた両国の信頼関係を大切に育み、後継者にバトンをつないでいきたいと考えています。人々が地域の現状を変えたいと思う時に、私たちJICAの支援が彼らにとっても使いやすいツールとなるよう、これからも努力していきたいと思っています。



コスタリカの地熱発電所建設プロジェクトで現地の担当職員との会議に参加する高島さん(左)